

## 英単語より見た女性の社会的役割について

後 藤 信\*

### A Study of English Words Denoting Women's Social Status —from Etymological Standpoint—

Makoto Gotoh\*

The aim of this paper is to connect the science of socio-information which is the subject of a brand-new department, to English literature & linguistics which is one of the background subjects in the interdisciplinary-oriented curriculum of Kure University.

The two aforesaid subjects are not necessarily compatible with each other from a conventional viewpoint, and are unlikely to merge into one, at a glance. But, I have come to find some correlative points on the two subjects in the course of skimming the articles on sociology and socio-linguistics, that is to say, 'language and sex/gender' is an area of study into which social science and linguistics converge.

Here, I have picked up some examples of word-inflections of nouns peculiar to sex/gender and some distinguishing features of proper names, occupation names and social titles denoting females.

Although my concerns are partly from linguistic studies, I have taken the theme up from my another concern at the social level.

I have tried to collect the remnant or current words, which reveal women's humiliated social status in the past, and added newly-proposed/born words for emancipating women from their home-bound condition, or the words for egalitarians to obtain the liberated world hoped for by women.

I hope this small paper will be of some help to the people who are devoted to social studies as well as women's studies.

#### Key Words (キーワード)

Women(女性), Words(言語), Society(社会), Name(名前), Marriage(結婚)

#### はじめに

社会と言語の関係を考える時、民族や地域、そして国家などが、統一された単位としての言語上の機能を持つ世界であることに気づくのである。

次に同じ言語を使って相互に意志疎通が出来る社会にあっても、社会階層別の、或いは男女別の

言葉遣いや特徴に注目すると、この異グループ間の言語表現に微妙な違いがあるのに又気づくのである。

ある言葉の生成を特徴づけるその社会的な背景を探ること、その語の形成過程や歴史的な変遷、更に語源にまで遡って、その語と人間の営みとの関わりの間に何があったのかを探ることによって

---

\*呉大学社会情報学部 (Faculty of Social Information Science, Kure University)

文学語学と社会学の交差する接点に近づくことが出来るのではないかと思ったのである。このような仮定と試みの気持ちから生まれたのがこの小論である。

### その1 女性を表示する名詞の特徴について

male-child, female-child のようにその語の前に性別を表す語を加えたり, 又, milk-man milk-maid のようにその語尾に性別を表す語を加えて男女別を明示する場合がある。

chamberlain, chambermaid のように古くからある語で男女同じ職種でありながら, その性差が仕事の中身に微妙に反映して意味となって顕れている語がある。それは現代の語にあっても salesman に対して salesgirl, saleslady などの形となって現れている。

-ess という suffix を語尾に加えて出来上がる女性形は何時頃から英語に採り入れられたのであろうか。

OE期には -estre という接尾語が女性の行為者, 動作主を表す際に加えられていた。それはME期になって-ester という綴りに変わる。然し, この -ester を加えて造る女性形はME期に途絶えてしまい, 今残っている英単語は spin → spinster 位なものである。もとの意味は“紡ぎ女”だったのが, 今では“結婚適齢期を過ぎた未婚婦人”の意味となっている。seam → seamster は“仕立て屋”となって, お針子の方は seam → seamstress となる。song → songster は歌手で, 女性歌手の方は song-stress である。

-ess の普及は1066年のノルマン人の英国侵入を期とする伝説の影響によるものと思われる。

シェクスピア時代には champion → championess, warrior → warriorress などが見られた。

近世に入っても -ess の形は多く見られたが, dictator → dictatress, orator → oratress, doctor → doctress などは現代英語からは姿を消しつつある。

-trix が語尾につけられた女性名詞を次に見て

みよう。

男性形	女性形
testator	testatrix
administrator	administratrix
aviator	aviatrix
prosecutor	prosecutrix

-a が語尾につけられた女性名詞

男性形	女性形
maestro	maestra
don	dona
czar	czarina
sultan	sultana

-a の形で語尾が終わるように屈折させることで対応する男性名から女性名をつくる

男性名	女性名	男性名	女性名
Victor	Victoria	Angel	Angela
Phillip	Phillipa	Anton	Antonia
George	Georgia	Julius	Julia
Christian	Christina	Octavius	Octavia

-ine で終わる女性名詞及び女性名を見てみよう

男性名	女性名	男性名詞	女性名詞
Joseph	Josephine	landgrave	landgravine
Clement	Clementine	margrave	margravine
Paul	Pauline	hero	heroine

-ette -etta を加えて女性の人名をつくる

男性名	女性名	男性名	女性名
Claudius	Claudette	Henry	Henrietta
Julius	Juliette	Laurence	Lauretta
Anthony	Antoinette	Harry	Harriet

-en OE期には -en を加えることによって女性名詞をつくっていた。

狐 fox を fix と言った当時, 方言として vox が用いられていた。その女性形が vixen であった。

“意地悪女”などの意味で今日でも用いられている

## 女性名の表す意味とその imagery について

(表すもの)	(女性の名前)						
真実	Alice	Emma	Vera				
善, 愛	Virtue	Charity	Agatha	Grace	Amanda	Ruth	Irene
	Bonnie						
美	Ann	Clara	Leoma	Mignon	Serena	Ingrid	
知	Sophia	Prudence	Sonia				
貞節, 純潔	Agnes	Virginia	Audrey	Fidella	Constance		
豊穡	Anonna	Theresa					
秩序	Cosima	Harmonia					
強さ	Brinna	Titania					
色	Blanche	Scarlet	Cressida	Jennifer			
星	Stella						
月	Dianna	Phoebe	Cynthia				
虹	Iris						
暁	Aurelia						
花	Daisy	Primrose	Lilie	Susannah	Poppy	Rosa	Pansy
	Marigold	Eglentyne	Hazel	Violetta	Iona	Salvia	Viola
生物	Deborah	Jemica	Vanessa	Phoenix			

## 男女共に用いられる名前

Dana Hilary Ocean Carol Bobbie  
Florence

## 家名で男系の意味を表すもの 下線部分は各国、地域語で息子の意味を持つ

Johnson Andersen MacDonald  
Fitzgerald Mendelssohn

## 家名で女系の意味を表すもの 下線部分はアイスランド語で daughter の意味である

Johansdottir

## 女性形のない名詞

## boor

独語の Bauer 農夫と同一の語源で“田舎臭い粗野な男”の意味合いが強くこの意味で対になる女性形はない

## clown

語源的にはラテン語の colonus 英語の colonist,

つまり植民者 → 農民 → 田舎者という風に意味が転移する。洗練度を欠いた人達への笑いの対象となったその笑いの種が jester としての独立した職業への道を開いたものと思われる。

## squire

騎士の従者、婦人に付き添う紳士の意味が示すように、これは男性の専用語となっている。

## satyr

もともとはギリシャ神話のサテュロス神に由来する。半身半獣の酒食を好む森の神バッカスの従者である。普通名詞となって好色家、色情狂の意味に用いられる。この語に相当する女性名詞は無いが病理学用語で性欲異常亢進症の場合には男子に satyriasis 別名 Don Juanism を用いるのに対して女性の場合には nymph を加えて女性の色情狂 nymphomaniac を使っている。

## 男性形のない名詞

gyneco 語源はギリシャ語で woman を表し英語の接頭語として使われる。gynecology といえ

ば婦人医学 *gynoecium* は古代ギリシャ・ローマの婦人部屋の意味で, *gynecocracy* といえは女天下, 母権政治の意味を持つ. 語尾に付加する形では *philogyny* 女好き, *misogyny* 女嫌いなどの言葉がある.

**amazon** ギリシャ神話に登場するその昔, 黒海付近に住んでいたと言われる女族の戦士に由来する語で男勝りの女, 女丈夫などの意味に使われる普通名詞である. この語に相当する男性名詞はない.

**milliner** 語源的には Milanミラノに由来する語であるが女子専用の帽子店の意味の普通名詞である. ところで, **doll, honey, sweetie, darling** などは主に女性を表す *vocative* として使われる. この中には女性が男性に呼びかける語は含まれていても, 男性が男性に対しては使わない語ばかりである.

#### 男女いずれにも用いられる語

**friend, neighbor, cousin, servant, artist, teacher** など多くの語がこの対象になる.

これらの語自体には性問題は特にはないものの, 性別を表す語を加えると性への意識が強まる.

例えば **boy friend** の場合, 女性から見た場合の異性友達, しかも, 限りなく恋人に近い男性を指すのが一般的である. **girl friend** の場合も *vice versa* である.

**teacher** の場合も同様である. **female teacher** といえは女性の特性や力量を強調した場合に使われている.

#### 女性名詞が先に生まれて男性名詞はその語尾屈折によって出来たもの

**bridegroom** の場合, 既存の **bride** に *-groom* が加えられて花婿 **bridegroom** が出来上がった. 同様に **widow** が先にあって **widower** が後追いで出来たものである.

#### 女性の社会進出と三人称単数代名詞の性別問題について

近年, 女性の社会進出に伴って従来は男の職種やスポーツ競技種目の分野に女性が進出は著しい. その結果, 英語においてはその行為者を表す言葉が三人称単数形で使われている場合 **he** で受けて良いものかどうかの判断の戸惑いが生じている. **truckdriver, carpenter, civil engineer, sailor, soldier** は勿論の事, **baseball player, football player** 迄その性別がどちらであるか分からなくなってきている.

例えば, 「あの先生の好物はは柰榴／バナナです」という意味を英語で伝える場合には, "*Pomegranate/banana is his or her favorite fruit.*" と表現しなければならなくなって, 従来の慣習語法に慣れている者にとっては, その言い方に若干の煩わしさも伴う事態になっている.

**feminist** の一部からは従来の **he** や **she** をこの際廃止して, **he** と **she** の中間の **tey** を新造語として世間で採択するようにとの提案がなされている.

#### 無生物名詞など擬人化による性別について

英語の場合その数は少ないが幾つかの無生物名詞を代名詞で受ける場合に **he** や **she** を使う場合がある. **boat, car, house, door, tree, earth, delicacy, fertility, graciousness** などは擬人的女性として **she** を用いる. **force, power, destructiveness** などは擬人的男性として **he** で受けることもある.

#### gender について

**gender** つまり文法上の性は自然の性とは必ずしも一致するものではない

独語, 仏語などの言語においてはあらゆる名詞に性別を示す冠詞を加えるのを常とする. これは古代より人々は無生物を含めた全てのもの, あらゆる現象, 物質界の表情や運動を眺めて人間生活の営みとの類似性, 男女の特性に適用してイメージを重ね合わせたのである.

無生物への性別の適用は人間が暮らしの周辺で目に映るものを生命と見ての思い入れの結果生ま

れた metaphor であり、人類の詩的想像力が生み、時間をかけて定着していった民族特有の芸術的遺産でもある。

例えば英語の pedal, pedestrian と関係あるラテン語の“足” pes は男性で、一方, manual, manufactureで知られるラテン語の“手” manus は女性である。

独語の場合、木 der Baum は男性で、薔花 die Blume は女性である。又同じ See でも海を表す時には女性の冠詞を付加すればよいのに、湖を表すときには男性の冠詞が必要となる。

次に同じ意味を表す語であっても国が違っていると gender も別のものとなる。車の独語は der

Wagen と男性形であるのに仏語では la voiture と女性となる。

ヘミングウェイはその小説「老人と海」の中でスペイン語では海のことを la mar と呼ぶがそれは海をその住処とする漁師達によって、或いは海を愛する人々がそう呼ぶ事によって生まれた言葉である。月が人間の女性を支配しているように月が海を支配しているのだと主人公の言葉を借りて述べている。自然を見つめる角度はその国や地域の地理的、文化的な条件の違いによって様々である。

ここで太陽と月の場合の gender を国別に対照してみよう

英語	独語	性	仏語	性	伊語	性	西語	性
sun	Sonne	女	soleil	男	Sole	男	sol	男
moon	Mond	男	lune	女	Luna	女	Luna	女

## その2 神話に登場する様々なタイプの女性達

自然現象、自然力の持つその恵みや脅威を擬人化、性別化することを含めてそれらを地上界の人間の出来事と重ね合わせる事で色々と解釈を行う。或いは、人間の英雄的な行為を超自然なものと結びつけて神格化する。こうした慣わしは原始時代いずれの国、地域でも行われている。

ここでは神話などに登場する幾つかの人物名とその単語の意味などの関連づけの中で幾つかの女性像の根元的な実像 prototype に迫ってその普遍化を試みてみたい

### 大地豊穡の女神

cereal 穀物という語はローマ神話の女神 Ceres に由来する。

ギリシャ神話の Demeter に相当する Ceres は大地から産出される穀物を司る女神である。

語を分解して説明すると de は大地 earth であ

り, meter は mother なので Demeter とは母なる大地を意味する。

Demeter は大地の豊穡と結婚の守護神である。つまり大地の豊作と人間の繁殖、繁栄との共通のイメージを重ね合わせることにより地上界の幸せを人々が祈願したその対象となったものであろう。

キリストの生誕の時より500年前、ローマでは干ばつが続き、人々は穀物の収穫の安全と保護を求めて Ceres への信仰に至ったといわれる。

**April** 四月はラテン語の aperire 葉が開く。即ち、母なる自然の womb が開くという意味である。

**May** 五月はギリシャ語の Miaia, ラテン語の Maius に由来する。Maius は Vulcan Maius の妻でその名前が彼女にこの月の名として献上されたものである。mia の語源はラテン語の magnus, 又は incrementum である。つまり植物が大きく膨らみ成長して増殖を行うという意味である。May Day 5月1日の春祭りには古くから May

**Queen** 五月の女王が選出されてその艶やかさを人目にさらす習慣がある。広場の中央には May Pole 五月の柱が立てられてその周りを娘達が輪になって踊る。この光景は春の訪れを歓ぶと同時に人生の春 puberty を讃える人々の気持ちが表されている。この光景の象徴的な絵図の形で両者のアナロジーが描出されている。

ここには sexual connotation が感じられるとさえ言われている。

参考までに必要とあらば古事記のイザナギ、イザナミの国生みの際における会話を想起されたし。

**June** 六月とはローマの女神 Juno を讃えて命名されたものである。

彼女は結婚の守護神である。女神の恩恵にあやからんとして June bride となるべくこの月の結婚を望む女性が多い。

**Friday** 金曜日 語源的に説明すると直接には北欧神話の主神 Odin の妻 Frigg の day 日、ということに由来する。彼女は Venus のゲルマン版で、愛と結婚の女神である。太陽系の惑星の一つである金星は彼女の名前から採られている。つまり英語の金星は Venus である。このローマ神話における美の女神ヴィーナスはギリシャ神話の女神 Aphrodite に相当する。

彼女は泡の中から裸身で誕生したと伝えられている。彼女は愛と豊穡の美の女神である。この語から英語の aphrodisiac が派生する。この語は形容詞では“催淫の”の意味に、名詞では催淫剤の意味となる。ラテン語の Venus の方は *venereus* となって意味は“ヴィーナスに捧げられた”とか或いは“色情的な”の意味になる。*venereal disease* といえは性の交わりによって生じる病気、つまり性病の意味である。又、*venery* となった場合意味は“愛に溺れる”となる。ラテン語 *Mons Venerius*, *Mons pubis* は英語に改めると *the mound of Venus* となる。日本語でも“ヴィーナスの丘”として知られている。

女性らしさ、清純さ

**comet** 彗星 この語源はギリシャ語で“長い髪

の人”と言う意味である。

これだけでは英語での性別化は困難であるが、仏語では女性名詞に分類される。

ギリシャ語で *kome* は“髪”を指す。彗星の尾の状態が女性の豊かな長い髪が風に吹かれてなびいている姿への連想を呼び、その比喻が定着したものと思われる。

**Flora** ゲルマン系の花を表す語は独語では *Blume*, 英語では *blossom*, *blow*, *bloom* などある。一方ラテン系の方は仏語の *fleur*, 英語の *flower* を以て広く知られている。

*fleur-de-lis* 白百合の場合外来系英語として辞書にも収まっている。ラテン系の *flower* もゲルマン系の *blossom* も同じ印欧語にその源を発している。

ラテン語の *flos* の意味を調べると

1. 花    2. 花の汁液    3. 全盛期    4. 血気
5. 精華    6. 栄冠    7. うぶ毛

などが記されている。

この *flos* からローマ神話の花と豊穡と春の女神 Flora が生まれた。そのイメージは脆さ、繊細美、無垢などを表していた。一方、男性の場合、この言葉は *flower of chivalry* 騎士道の華として象徴的に用いられた。男らしさ、力への礼讃が頂点に達した中世後期にはそのイメージは *vigor*, *strength*, *maturity* などといったものであった。

**Vesta** ローマ神話の女神 Vesta はギリシャ神話の Hestia に相当し、かまどの女神である。家のかまどは家庭の中心であり、家庭の統合の象徴である都市国家にもかまどがあり、役所のかまどには絶えず火が燃えていた。ローマの Vesta 神殿では *vestal virgin* の6歳から10歳の間の巫女がいて(4人、後に6人から成る)かまどの永遠の火を消さないように守っていた。30年間巫女を勤め、その間、処女を通さねばならなかった。それを失った時には生き埋めの刑が課せられた。

**Echo** は山彦、反響、の意味で日本語としても親しまれている。*echo* の語源はギリシャ語で *O* *F* を経由して英語に入ってきたものである。

山の妖精の Echo は美少年 Narcissus に恋を

した。その Narcissus とは日本語でナルシズム、泉に映った自らの姿に恋をしたと言う自己陶醉症としての用語を以て知られるかの美少年である。そのナルシサスは自らの美貌に夢中でエコーの彼に寄せる愛を無視したので、彼女の身体は次第に痩せ細って遂には彼女の肉体の部分はゼロとなったとされる。

そしてその声だけが残ったのである。

#### 魔性の魅力をもつ女性

Siren サイレンと言うと日本語では災害時の警報などの意味として知られている。

英語の siren も今日ではこの意味で多く用いられる。語源はギリシャ語である。

ギリシャ神話によれば、Sirens は海の妖精で岩礁に座って彼女の持つ妙なる歌声で その前を航行する舟人達をおびき寄せて破滅に至らせたと言われている。

Sirens とは半人半鳥の姿をした海の精でギリシャ語の意味は“人を不幸に巻き込む人”を表す。

広く知られた話としてはトロイを陥落させたギリシア側の部将の一人であるユリシーズが故国に海路帰還中に Sirens の棲む島を通過した時、その誘うような魅惑の歌声に悩まされた。水夫達の耳にろうで栓をさせて塞ぎ、辛うじてその島に引き寄せられるのを防いだといわれる。

Sirens 伝説は広くヨーロッパ各地に流布されて各地版の Sirens 伝説も生まれた。

ハイネの詩で有名になったローレライ伝説もその一つである。

#### ウーマン リブの元祖

Eve OEDには Adam を人類最初の男として紹介しているが、Eve の方は何故だか出てこないが Webster には Eve は登場する。

Eve とは万物の母なる女神として広く中東地域で用いられている名前であった。

ところで Patricia Monaghan は Women in Myth and Legend の中で Eve を次のような姿で紹介している。それによるとユダヤの伝承の中

ではイヴは地上初めての女性ではなかった。創世記の初版では人類創造の箇所「神は男女を同時に作り給えり」とあった。それが旧約聖書では改ざんされてエホバが男性を最初に作り女性は後に加えられたのであった。

そしてアダムと同時に作られたその女性の名は Lilith という名前であった。

人類最初の男性であるアダムがその女性に交わらんと欲した時、彼女は彼同様積極的な欲情の反応を示した。彼が床に誘った時、彼はその場の内容における男性優位、上位を望んだ。その女性は男女は対等に権利主張出来るように作られている筈だと言って男の指図を拒んだ。

アダム直ちに神に申し出てもっと従順な女性を賜るように願ったのである。

その結果彼に与えられたのが Eve であるという。ユダヤ、キリスト教は Eve を以て、後世の女性の規範となるようなタイプの女性を与えたのであった。Eve はヘブライ語で 生命 を表す。Eve は Eva のフランス語版である。

※ この箇所は巻末の参考文献に挙げた Woman Words の中に詳説されている。

#### その3 sexism と feminism について

sexism 男女差別主義と言う言葉は 1960年代のアメリカにおけるヴェトナム反戦運動、黒人差別撤廃の市民権獲得運動の盛り上がり運動して起こった婦人解放運動の中で生じた用語である。

racism, racist 民族差別主義、民族差別主義者からの応用語であろうと言われている。民族の melting pot と言われる米合衆国でも blacks, Asians, Hispanics, natives などの立場から見ると Caucasian の優位、民族差別の社会構造が存在する事実は否定出来ない。そして、女性の目から見れば同じく男性優位、女性差別の社会がある。そうした体制への変革を求める標語としてこの語は生まれた。そして今後に向けて定着しようとしている。

sex という語はラテン語の sexus (女性の場合は

secus) が OF を経由して中世後期に英語に入ったものである。独立した単語として用いられるのは稀で、多くは性別による社会的な実相を示す形容詞を伴って使われたのである。

女性の場合, the weaker sex, the weaker vessel, the gentler sex, the fairer sex, the softer sex, the devoted sex そして the second sex (第二の性) などが用いられた。

男性から性対象の用語として sex-kitten, sex-boat, sex-bomb, sex-pot などの言葉がやがて生まれるようになる。

一方, 男性の方は the better sex, the sterner sex と呼ばれた。

ここに幾つかの英単語を取り出してそれらの語が男性優位の社会にあって女性が社会的にどのように待遇されていたかのバロメーターとして見てみようと思う。

**Albion** とは英国の別名と知られ一般的にはその語源はラテン語の albus 白に求められる。そしてその語はドーヴァーの白い壁に結びつけられている。然し別の説によればその昔シリアの王がその大勢の娘達を同時に親の取り決めた相手に嫁がせようとした。娘達はそれぞれの嫁ぎ先で結婚式の夜、強いられた結婚に抗議して相手の男性を殺害した。立腹したシリア王はその罰として娘達を船に乗せて潮の流れ風の向くままに委ねた。船の到着先はたまたま英国であった。娘達はそれぞれ自分の意志に従ってその土地の男性と結婚した。親の意向に逆らった娘達の長女の名は Albia と言った。英国と albion の関連はかくの如きものである。

**bride** 花嫁 とはゲルマン系の語 bru 英語の boil に発する語で同系の語に brew 醸造する broth 肉汁などを煮じるなどの意味がある。

bride とは父系家族にあって夫の家で家事などの台所を中心とした伝統的な女性の仕事をする人の意味であった。

OE 期の bryd という語は婚前の婚約者の意味であり、婚約の際の儀式の酒を brideale と言った。この語は 16 世紀頃まで使われた。その

brideale が詰まって bridal となった。結婚披露宴そして結婚式の意味となって今日に至っている。girl もともと child という感じの言葉で、特に女性に限定された語ではない。ME 期には knave girl と言えば男の子を指していた。近世に入ってからこの語は virginal の意味をも含んで家事労働に雇われている女性 maid-servant に使われるようになる。20 世紀に入って shop assistant の意味に適用されるようになる。それは結婚する迄の一時的な職業を意味していた。そのせいか、結婚して生涯的に収まるべき場所に身を落ち着けた時に女性は woman と呼ばれた。その意味で生涯にわたっての職業と言う意味からも career girl という語よりも career womanの方がより多く用いられる。又“出戻り娘”をいうときには girl again の言葉が使われる

**maid/maiden** この語が英語に入ってきたのは 11 世紀頃である。

maid は住み込みで家事を手伝う女性として雇われ同時に virginal である事が雇う側の必須条件となっていた。virgin としての身持ちの堅さが要求され、万一、その女性が受胎したような場合にはその職場をお払い箱となること必定であった。名目上の賃金は支払われたが、衣食住の必要経費や、その他全般的な生活保障の費用が差し引かれて maid の受け取るお金はほんの僅かでしかなかった。

maid を加えて出来る複合語には barmaids, chambermaids (貴婦人の腰元, ホテルの寝室整備係り) nursemaids, homemaid などがある。maid は純潔無垢, 貞節などがその意味の本質とされた。そこから、征服されない, 犯されない, 新しさなどの意味が生まれた。Maiden Castle とはイングランド南部の Dorset にあり、一度も敵に踏み込まれたことのない, 落とされたことのない城と言う意味である。maiden snow, maiden soil とはいえまだ人の足に踏まれていない, 汚されていない雪や土の意味になる。

maiden name とはいえ女性の結婚する前の旧姓を表していた。cf. nee (旧姓)



18世紀英国では女性が結婚すると以後は first name すら無視されていた。例えば Elizabeth と言う女性が John Smith と言う名前の医師と結婚すると Mrs John Smith とか Mrs Dr Smith とかが世間的な通称となるのも稀ではなかった。

つまりその所有者、その持ち主の姓や職業を名乗れば良いという具合である。これではまるで奴隷や家庭飼育用ペット動物の場合のように、その名前だけあって、姓の方は主人の姓だけが必要であるのと変わらない。今日の企業合併でいう吸収合併であって対等合併とは言えない状態であった。

それが、いくら優雅な生活に恵まれていても、これでは既婚婦人に独立した社会的人格は与えられていなかったと言われてもやむを得ない。ところで今日の英和辞書を引いてみても old maid の箇所には

1. 年を取った未婚の女 2. 几帳面でこうるさい人 が記されていて spinster の場合と同様に嘗て日本でもあったような独身状態を続ける女性への好奇心と bias のかかった視線がこの語句には感じられるのである。

woman はOE期には wifman と綴られた。wif とは女性を表し man は mankind つまり人類を示していた。woman とは弱い存在であるが故に、男性に従属するものとされた。辞書によれば womanish とは女々しい、動詞の woman には泣いたりなど女々しい振る舞いをする。熟語では make a woman of ~ が~を服従させるの意味になる例などが記載されている。これらからもおよそのこの語の意味の輪郭は察せられよう。

housewife 中世の頃は、この語は大きな館の家事を取り仕切る権限を持つ立派な役職であった。やがてこの役は料理、裁縫技術の提供と家計の儉約を行う職務へと矮小化されてゆく。更に家庭における手工芸、手作業の持つ創作的な側面は、産業革命以後、次第に無くなって、嘗て maid-servant が行っていたような労務、雑務を行う役となってゆく。19世紀になると housewife とは

その夫が家政婦を雇う資力のない妻という意味に転じるのである。そして今日先進国では家庭で働く無給労働者、或いは結婚相手として man と結婚したのではなく house を選んだ女性などの意味にも用いられるに及んでいる。ところで hussy あばずれ女と言う語はその語源を housewife に発している事は多くの人の知るところでもある。

governess govern の語源はギリシャ語の kubernan, ラテン語で gubernare となる。それを英語に改めると steer 舵を取る, direct 指示を行う, rule 支配するの意味になる。

OFの governor という形を経由して英語に入ったものである。支配し君臨する女神の意味を持つ女性名詞の governess は、中世には女知事 女総督や、知事、総督夫人の意味に用いられた。

16世紀末～18世紀にかけて女性の場、govern の指揮又は統御する対象が子供に限られるようになる。その結果、個人の館の女家庭教師の意味になったのである。

一方、これに対応する男性名詞の governor のほうは州や県などを統括する長官としての意味に使われて元の意味を保っている。

governess の方は女性はその力の発揮を委ねられている家庭と言う小社会の枠の中に限定されることになった。19世紀の小説 Jane Eyre の中では天涯孤独な Jane が、雇用条件の不安定な、住み込みの governess を職業として自立して生きていく事の苦しさが描かれている。

ところで governessy という言葉には“取り澄ました”という意味もある。

以上言葉の意味から見てくると両性の当事者だけによる結婚もそれぞれの背後にある家族、特に父親の承認無くしては結ばれる事は困難であった。女性が独立して外で働くことの難しさは何に起因していたのであろうか。

女性は結婚して家庭の中に座すべきものだと決めつけ、その為にも娘時代を virginal に過ごす必要を説く社会風潮などは、今尚、世の東西問わず身近に抱える問題である。今日、女子学生が卒

業期における就職難に直面すると何処からか女性の家庭復帰と、家庭内外においての男女の働きの分業化などが世間の何処かで囁かれる。

好景気の時、海外からの労働力に頼った企業、社会が、一旦不景気に転じると、その海外より渡来した外国人労働者を寧ろ排除しようとする。その現実を女子労働力利用のとのアナロジイに重ねてみよう。そこには正に racism と sexism との接点を見ることが出来るのである。

sexism とは male chauvinism の旗をを積極的に振りかざしてその優越性や排他性を誇示しようとする男たちばかりを対象にしているだけではない。double standard を含め、今日の社会矛盾に気づかずに「女性は家庭にあっておしとやかなのが良い」と大真面目に考えている女性を含めた人達の現状維持型の考え方も sexism に他ならないのである。

さてここで feminism に目を移してみよう。

female という語は young or little woman を意味するラテン語 femella から OF の femelle を経由して英語に入ったものである。

masculinity とはいえ雄々しさ、剛勇の意味となるが、一方、femininity という受容性、従順性、弱々しさなどの意味を持つものと一般に理解されている。effeminate となると女々しいとなって男性の軟弱性を指す場合に用いられている。

一例を挙げるならば、feminine ending と言えば詩の行末にくる強音節の語に一つまたは二つの弱音節が続く事を意味する。

masculine ending となると詩の行末が強音節で終わっていることを意味する。

男女の特性がこのような用例の中で piano と forte の関係に応用されていることには注目に値する。

feminism 婦人解放運動、女権拡張運動その主義者 feminist という言葉の由来は 1850年代より使われるようになる。正式には1892年の第一回国際婦人会議でその会議の標語に仏語の feministe という言葉が用いられたのがその始まりと言われ

ている。その後の婦人参政権運動 female suffrage movement を通してこの意味の定着が進んで行く。

ここで feminist 達が問題ありとして指摘する幾つかの実例を挙げてみよう。

スペインの諺に Men speak, Women Chat がある。つまり男は話しをするが女は閑談をするという意味であろう。

shoptalk とは主に男が仕事の話、商売の話、そして専門的な話しをする場合に当てられる語である。一方 gossip, gossipier と言えば多くの場合、女性の雑談を指している。

battle-axe とは“がみがみ女”の意味に使われているが、中世には戦いの際に使用される武器、大斧としての意味であった。やがてそれが口論好きの、威張った、vociferous 騒々しくて不快感を与える、美しくない女の意味に用いられるようになる。又男性の場合 professional と言えば専門職の意味を指し知的技術やスポーツ専門家などの事を言う。女性の場合に professional と言えば娼婦と受け止められるのが一般的である。aggressive の場合も男性の場合であれば、積極的とか、やる気のある意味に、女性の場合には、押しの強いとか攻撃的といった意味になるのである。

その他女性のおしゃべりを表す語に biddy, shrew, fishwife, vixen など多いが、女性は寡黙にして黙従する事が美德とされた社会の反映であろう。次に男性側から作られたと思われる、女性と何かを結びつけた連想又は比喻の中で生まれた、多くの女性には好まれない語や、又は feminist の側から生まれた語であっても男性側から揶揄の目で見られた語をを挙げてみたい。

bird 若い女性

cat 口の悪い意地悪な女

cow 大きく太っていてだらしない女

tart 果物入りパイ、ふしだらな女の意味になる。ヴィクトリア時代には女性は甘い食べ物に喩えられた。biscuit, cake, confectionary など女性のために用いる euphemism である。crumpet と

はホットケーキの一種であるが性的に魅力を持つ女性の意味に使われる。appetite の場合がそうであるように食べ物と女性とは共に欲望の対象としてそのイメージが重ね合わされている。食べ手の側の人を選ばないので上記の意味が生まれたものであろう。cf. Yellow Cab

**cherry** 本来の意味は‘さくらんぼ’であるが、hymen, virginity に喩えられる。

**pussy** 猫。毛のある柔らかいものの意味から female genitals に喩えられる。

**dish** 皿の意味からこれも食べ物のイメージで男の欲望の受け皿の意味から性的に魅力のある女性を表す。

**prude** OF の preu de femme, preudefemme の back formation として出来た英語が prude である。

preu とは本来の意味は fine, brave, virtuous であり predefemme とは excellent woman 尊敬に値する婦人の意味であった。17世紀モリエールが overvirtuousness の意味に用いて以来、仏語でも貞淑ぶったとか、猫かぶりの女の意味で使われ英語でも同様の扱いを受けている。

**bluestocking** 18世紀中期にロンドンの知識婦人を中心とした文芸協会、その中の男性会員が正装の黒絹のストッキングの代わりに青色のウーステッドの靴下を履いていたのがこの語の由来と言われる。文学又は知的趣味を気取る女、学問好きの女などの意味に用いられている。

**bloomer** 米国の女権拡張主義者の Amelia Jenks Bloomer 女史がこのもんぺ型のだぶだぶしたズボンを、男性優位の社会体制を変革し、社会に出て活動するのに能率的な衣裳として、自らも常用し他の女性達にも着用を推奨した事に起源の由来する語である。

後半に示した言葉は近世から現代にかけて女性が伝統的な身の置き所である家庭から社会へ 職場へそして男社会へと進出しようとする段階で、教育、技術、服装など従来の男の領域の文化の一部を取り入れようとした際に男性側から生意気だとして浴びせられた一種の揶揄と言える。

ところで -ette という接尾語が男性名 Antony から女性名 Antoinette を造る場合などに用いられる例については既に述べた。それが同じく普通名詞 kitchen から kitchenette と転じた場合のように、小型化、簡易化又は愛称化の指小辞として使われているとして、そうした用例に見られるような「可愛い子ちゃん」化された女性語のことが sexism の生きた実例だとして反駁する女性達の主張がある。それに対して男性側から加えられる揶揄や批判は -man の場合に就いても言えるのである。

feminists の指摘する mankind の意味で使われている“man-made 人工の”の場合顕著に現れる。「この man という語をいわば男性の専用特許としておくと wo-man が除外された事になる。これをおよそ意味の似た artificial に改めるべきではないか」という彼女達の指摘に対しても「そんなどうでも良い事をあげつらって」と男達は女性達の心の狭さ笑うのである。manpower についても同様の事が言えよう。

女性が男性と同じ職場や同じ職種の世界に入っていくようになった今日、もし従来の用語 -man の形がその職業従事者を表す男女別を持たない generic として解釈されないで職場における男性優位或いは女性差別の今なお生きる言葉の上での証拠として論じられるならば、statesman, mankind はそれぞれ state-leader, humanity などと改める必要が生じてくるであろう。

我が国の国会でも女性議長が誕生した現状から chairman も man が仮に、男の意味に解釈されているとすれば問題があるだろう。

その他、fireman policeman なども firewoman, policewoman が不適当とあらば chairperson の例に倣って全て -person の形に改めるべきなのであろうか。やや歴史的用語とも言える highwayman (追い剥ぎ) の場合はどうであろう。序でながら hijack の -jack は男性表示語である。

現在、第○号と数字で表される季節台風も、嘗て米軍の占領下の日本ではアメリカ流に Jane 台風とか kitty 台風とか呼ばれていた。今日では

そのアメリカでは愛称が女性名に限られている事への不公平が指摘されて Carol という女性名と同時に Charles という男性名も台風名に用いられていると聞く。

言葉と時代の変革が同時進行していないのでこのような問題を我々は日常生活の中で一杯抱えている。その言葉の同時代的な視点から見て一方では用語の矛盾を、他方においてその言葉の通用度や定着度の現実をどのように処理すべきかの課題をも残している。

解釈の柔軟性で切り抜けるか、或いは積極的な新語を作り出してそのキャンペーンを行うのも一つの方法ではあろう。それが何処まで効を奏するか。嘗ての人造国際共通語エスペラントの例も考えてみる事も必要であろう。

次には、それがユーモアなのか或いは過激な feminism なのかは別としてヒマラヤの雪男と言う表現は日本語では疑問視されなかった語である。英語の場合、性別のはっきりしないのに男性語 man を以て snowman とした事は正に男性優位、androcentric の社会の投影であるとしてその不合理性を指摘する向きもあるやに聞く。

ここで女性の敬称 Miss, Mrs. の問題に触れてみたい

まず最初にこれらの語に語源的な access を試みると英語の master, chief を表すラテン語は magister である。その意味を言えば magis は英語の more, そして magnus は英語の big に相当する。magnify や magnitude, magistrate はこれより派生した語である。

ラテン語 magister は中世に OF の maistre を経由して master となる。15世紀頃 mais- の形は敬称に使う際その stress が弱まって mister となったものと思われる。mistress は同じく OF の mais-tresse を経由して mistress が出来上がった。当時の意味は master の女性形、即ち使用人を監督し家事を取り仕切る長であった。その他この語には支配者、女王、女神、守護神、教師、技術の卓越者などの意味を持っていた。

その後この語に意味は下落して“囲いもの、お妾

さん”更に“売春婦”の意味にも広がりを見せる。miss は mistress の簡略形なので、意味は Mistress と同じである。今述べた意味をも当然含むものであった。簡略形は同時に愛称にも通じてくる。mistress が大人の婦人全般を指すのに対して miss の方は女の子、学校を卒業したばかりの少女の意味に限定されるようになる。やがては独身女性への呼びかけの際の敬称となり、既婚婦人の方は Mrs. となって既婚、未婚別に分化してゆくのである。

20世紀に至って Mrs. Miss の区別を結婚しているかどうかを表示する事に対して feminist 側からの疑問が出されるようになる。

Miss を名前の前に置くことによって女性を結婚市場に出す場合の商品リストに載せられた感じを与えるとの指摘も行われた。女性の既婚者、未婚者を区分けての敬称を持つのは何も英語ばかりではない。

伊語の場合には Miss の場合には signorina, そして Mrs. の場合には signora となる。仏語の場合には Miss は Mademoiselle, Mrs. の場合には Madame となる。独語の場合には Mrs. の時には Frau であるのに Miss の場合には指小辞 -lein を加えて Fraulein となる。

Feminist 達は男性には既婚者、未婚者を問わず Mr. だけしか無いのに、女性には Miss Mrs. の別があるのは不公平、不合理であると指摘するのである。

すべて Miss に統一すれば良いとか、或いは Miss の文字から M を、そして Mrs. の中から s を取り出して Ms という新造語を当てれば良いなどの提案も行われている。usage としての定着度は今一步の感は拭えない。

英語の場合、Miss も Mistress も歴史的に見ると元は同一の語であったのに近世において分流してしまった。それは又一つの川に合流してゆくのであろうか。

結婚までの娘時代を純潔に過したのち、良き配偶者を得て結婚し、姓を男の家系の姓に変える。そして男性は外で社会的な仕事に携わり女性は家事

に専念し又子育てに勤しむ。家庭を大切に思う両性が協力と分業の中で互いに相手の人格を尊び愛に満ちた幸せな人生を過ごす。これ即ち美德であり、性のそして愛の倫理でなくて何であろうと思っている人も多い。これこそ伝統的に男性だけでなく現代においても女性の一部にも受け入れられている自然な、女性の一つの生き方でもあろう。

然しこれを容認する事が feminist の側からすれば現状肯定の側、つまり sexist となるのである。又他方においては、家庭の枠に囚われず、又、既存宗教の伝統的な倫理観にも捕らわれずに、社会に大きく羽ばたいて行くこと。男性と全く同じスタンスで社会生活に立ち向かって、政治に、社会経済に、産業技術にその一員となって外での仕事に加わり働いて行くことが女性の望ましい生き方だとして従来の結婚の在り方を問題視する feminist の側の主張も同じく正しいと言える。

旧来の男女分業体制の中にあっては社会生活の中で女性個人が持つ適性、能力の開発とその社会的な適用が充分でなかった事実は否定し得ない。第一次大戦時、男達の始めた戦争の結果、男達が戦場へと大量動員されて産業界の各分野は人手不足を招く。その結果、工場その他の職域に女性が狩り出されて女性の社会参加を、社会意識の昂揚を生む。やがてそれは婦人参政権や職種を問わない男女の職種選択への道を開くに至ったのである。又、extramarital affair の際に adultery の罪を、姦通の烙印を、法的に、或いは道徳的に一方的に女性に背負わされた過去の時代からも今は解放されている。更に電化製品の普及等とも相まって家事労働の軽減やその他、時代の要請もあって女性の社会進出は加速化されようとしている。

このような時代の推移の中では、従来の女性特有の言葉遣いや色彩に対して豊かで繊細な観察、反応表示や、更に、控え目な性アピールとか、又その本性が好戦的と言われる男性に較べ協調的で平和的であるとされた女性の特長などは、女性が本質的に備えているものなのか或いは時代や社会環境によって変化して行くものなのだろうかという疑問もわく。

19世紀の英国女流作家のジョージ・エリオットはその筆名に好んで男性名 George を用いた。

一時期ショパンと愛の生活を営んだジョルジュサンドは当時では珍しい男性的なパンツルックの装いを好み、公衆の前での喫煙を嗜んだ。彼女は又多情で、その生涯多くの情事を重ねている。日本でも岡本かの子、宇野千代などの女性はこの延長線上にあると言えよう。

一方、鉄の宰相サッチャー氏の人生は、異性との関わりと言う点では平凡な既婚者としての人生を過ごしている。その半生には浮ついた話や艶聞等はない。そして国内外の政治の世界において鉄の意志と行動力を示した彼女の一面とは別に、服飾などでは女性らしい美しさの表現と演出には細心の注意を払っていると言われている。

その昔、国際政治の舞台と自らの色事とを重ねた、かのクレオパトラとは大変な違いがある。

その母を feminist そして社会学者に持ち、自らも人類学者で世に知られた Margaret mead は結婚、離婚、再婚、再離婚、そして再々婚、とその結婚歴は多彩であった。

ところで女性解放とは何か。もしも女性解放というスローガンが上滑りに流れて、従来の性別秩序の世界における女性像から脱皮して、ただ形だけ男性と同じ社会生活での活躍を行ったり、その生活の中で異性との関わりに自由な発展を求めると言ったその生き方だけを以て女性解放とか歴史上の進歩だと結論づけるのには必ずしも賛成は出来ない。

今日、単純に伝統的な結婚形態を否定したり、飲酒喫煙や服装その他、男性文化をただ模倣して意気がつてみたり、一夫による束縛と家庭という足かせを解き放って、動物の世界における、そして人間においても原始時代にあったような、母権的社会の再来を夢見て自由奔放な恋愛を見境い無く重ねたり、結婚後の夫婦別姓の主張、生まれた子供の命名に男女の識別の困難な名前の採用や、ミスコンテストの廃止を声高に叫んだりする事で男女同権社会の推進者であるかどうかの identity 求めたり、-man 等の例を挙げて言語表現上の単

なる揚げ足取りに終始している人達もいる。

しかしながら、stewardess を flight attendant と改めただけで事足りりとしたのでは空しいものになるであろう。

英単語の中の女性関連の語を見てくると男女間の力関係の綱引きは時代によっても又個人においても異なる事に気付くのである。言葉や社会風俗における影響力とは、国家間、民族間、更に同一社会の階層間においても言える事であるが、その力関係においてより強い側がその力を他方に伸ばして、勢いのまま、影響を他に及ぼしてゆくものと思うのである。自然な時間と流れをもって、他のグループ社会の言語や慣習を浸食して、次第に再編成へと向かうのではあるまいか。

英語、日本語共に言える事に、男女共学や積極的な女性の職場進出に伴って、従来からあった男性言葉？が女性間に急速に広がって採用されている皮肉な事実は女性解放運動の趣旨と合致しているのであろうか。

ともあれ、言葉とは移り変わりゆく世相の変化を映し出す正に '鏡' である。正邪の価値基準を以て臨むのではなく、あるがままにじっくりと見つめて行く必要があるように思うのである。

### あ と が き

嘗ての旧制大学が3年間の旧制高校において語学及びその他の一般教育科目 liberal arts をみっちり仕込んだ後の学生を引き受ける教育機関であったのに較べて、戦後に誕生した新制大学は1年半の教養課程と2年半の専門課程から成り立つコースへと変わった。旧制の場合、高校、大学と合わせて6年間の期間だったのが新制では4年間

に短縮されてしまって何だか compact な感じの教育課程となっていた。

それでも旧制高校の半分の期間が大学の一般教育課程として制度化される。そして、独自性を持つ学内組織として認められて学部準じた扱いを受けるに至る。

近年、この教養部の解体が各大学で進んでいる。それぞれ新設学部看板を改め、再出発しようとしている。

一般教育科目は、それぞれ新学部新学科の core となる専門科目に繋がる従属科目として、科目としての特性を持つに至っている。その科目はいわば基礎専門科目としての役目を担っている。医学部における英語と芸術学部における英語とでは微妙に差異を生じてくるのも当然の帰結となろう。core 科目中心に再編成が行われている現段階にあってこれまで英語英文学を研究テーマとして専攻し又教育の面では直接的には専門コースとは繋がらない一般教養英語を担当してきた者が、今回、呉大学の社会情報学科の中でどのようにその core subject と結びつけて行けば良いか、これは大きな課題となっているのである。

この小論はこれまでの自分の専攻と、これから core となる学問との接点というか、境界線を右往左往しながら彷徨した記録に他ならない。

interdisciplinary study など、言うべくして大変な難事である事を痛感している。

未経験の分野という点に関してはコロンブスの卵の例にあやかって開き直すより他はあるまい。創刊号の栄えを汚すのではないかと内心は心配でもある。どうかその点があれば、お許しを乞うばかりである。

## 参 考 文 献

## 語学関係

- | 書 名   | 著 者                | 出 版 社                            |
|---|--------------------|----------------------------------|
| ◦ A grammar of late Modern English            | H.Poutsma          | P.Noordhoff Groningen            |
| ◦ A Functional English Grammar                | Margaret M. Bryant | D.C. Heath and Company<br>Boston |
| ◦ The English language and<br>English Grammar | Sammuel Ramsey     | Haskel House Publishers Ltd.     |

## 社会学関係

- |                        |                 |                         |
|------------------------|-----------------|-------------------------|
| ◦ Language in Society  | Suzanne Romaine | Oxford University Press |
| ◦ Sociolinguistics     | Peter Trudgill  | Penguin Books           |
| ◦ Language and Culture | John McConnell  | Seibi                   |
| ◦ 《情報》の社会学             | 小林 修一           |                         |
|                        | 加藤 晴明           | 福村出版                    |

## 女性関係学

- |                  |            |         |
|------------------|------------|---------|
| ◦ Woman Words    | Jane Mills | longman |
| ◦ シェクスピアの女たち     | 青山 誠子      | 研究社     |
| ◦ ヴィクトリア小説のヒロイン達 | 松村 昌家      | 創元社     |
| ◦ 中世都市の女性達       | エーリカ・ウイツ   | 講談社     |
| ◦ アメリカのおんなたち     | カール・N・デグラ  | 教育社     |
| ◦ モードの社会史        | 能沢 慧子      | 有斐閣選書   |

## 使用辞書

- |                                  |                                      |                     |
|----------------------------------|--------------------------------------|---------------------|
| ◦ The Oxford Dictionary          |                                      |                     |
| ◦ An Elementary Latin Dictionary | Charlton T. Lewis                    | Oxford              |
| ◦ Dictionary of First Names      | Leslie Dunkling<br>& William Gosling | J.M.Dent & Sons Ltd |
| ◦ Dictionary of Word Origins     | John Ayto                            | Bloomsbury          |